



洋書輸入協会会報

Vol. 29 No. 9 (通巻340号)

理事会報告

9月18日(月)

(一) 7月、8月分収支報告

9月11日(月)開催の総務委員会で審議の7月並びに8月の収支について総務委員長の報告を承認した。

(二) 委員会活動の点検と見直し

去る5月26日開催の定時総会で出席の会員より質問と要望のあった委員会活動について当日当該の委員長より即答した案件を除き、一度各委員会での検討を約したが、改めて各委員長にそれぞれの見解を纏めるように要望した。

海外ニュース

BISG による

'95, '96 年米国出版業界の景気予測

米国の the Book Industry Study Group の予測によると、1995年の出版・書籍業界での売上は7%増で196億ドルと好調だが、翌1996年にはわずか2.4%増と過去10年間で最低の伸びとなるという。

この分析と合致して、米国の大手出版社の経営陣で来年の収益減に強い警戒心を抱いていない者はいないらしい。州による中高生用選定図書の減少、学校や図書館の財源不足、消費者動向などが'96年の売上の足を引っ張る原因となりそうである。

これに反して95年の明るい見通しは、一部は州の選定図書の増加によるもので、このおかげで el-hi ブックスの売上は8.8もの伸びとなりそうである。専門書、大学出版社のタイトル、トレード書いずれの分野でも今年は7~8%の大きな伸びが予想されている。

(単位 \$100万)

分 野	1994(\$)	1995(\$)	%(+)
トレード書	5,470.8	5,909.6	8.0
マス・マーケット	1,392.4	1,454.6	4.5
ブッククラブ	873.9	928.2	6.2
メールオーダー	557.3	565.4	1.5
宗 教 書	978.0	1027.9	5.1
専 門 書	3,606.1	3,921.1	8.7
大学出版社	325.7	351.3	7.9
ElHi	2,155.8	2,345.5	8.8
カ レ ッ ジ	2,176.8	2,296.5	5.5
Standard. テキスト	156.5	166.0	6.1
Sub. レファレンス	641.3	684.9	6.8
合 計	18,334.6	19,651.0	7.2

—Publishers Weekly 8月14日号より—

目 次

理事会報告	1	お知らせ	2	うちの会社	4
海外ニュース	1	海外零れ話し	3	インターネットの正体	5
文化厚生委員会だより	2	「東京の坂と橋と文明開化」を終えて	4	洋書輸入協会史99	6
				広 告	8

フォーティラブ (JBIA テニス同好会) 初夏合宿

——箱根〈明神平〉サニーパーク 1995・5/27(土)参加 14 名——

フォーティラブの今年度・初夏合宿は、JBIA 懇親会が前夜に開催された箱根温泉郷に至近で、昨年初めて利用して好評だったスポーツ・リゾートである《明神平》サニーパークにて、5月27日(土)に挙行。昼食を挟んで正味7時間程、オムニコート2面を借り切って、硬式テニスの練習試合を存分に偷しんだ。快晴の日和に恵まれ、新緑の樹海、多彩な草木や遠くには眺望に豊む大庭園も備えた当施設には、箱根らしい独特の野趣あり。早春の津久井湖畔〈プチビラ〉、晩秋の白樺並木に囲まれた紀伊國屋・山中荘とは、又一味違った雰囲気ので、初夏にふさわしい利用価値のあるテニス・リゾート。野鳥や蟬の声も賑やか。

今回は、幹事の柴田、村上、塩川各氏の周到なる手配で、テニス練習試合の連戦の後、ついでに箱根の温泉で《ひとつぶろ》浴び、充分にリフレッシュして帰るというスケジュールが組まれた。練習試合では、女性陣容に今回再登場及び初参加の室伏、常住御二方(丸善)を迎え、一見リラックスしながらも、好打を競う熱戦が続出。

従ってリフレッシュの乾盃の機会も、昼食、温泉入湯、小田急特急待ち合せ等各時間帯に利用した各料亭及び帰路の車中も加え都合4回と恵まれ、久びさに修学旅行気分、参加者全員の方々に偷しい一時を過ぎて頂いた。今回参加者は、各社別に丸善(4)、医/MYW(3)、紀伊國屋(2)、東光堂、マイブック、ロングマン、教文館、友隣社各(1)計14名。当会は、今年度に更に3回の行事を予定。乞ご期待。

(リフレッシュ・サーバーW生)



お知らせ

◎北尾書籍貿易株式会社の代表取締役社長が8月下旬のように交代されました。

就 任 岡 田 光 雄 氏

退 任 北 尾 精 造 氏

(但し、北尾氏は取締役会長に就任されました。)

◎幸洋商事株式会社の代表取締役が下記のように交代されました。

就 任 浅 野 佑 氏

退 任 淀 縄 憲 一 氏

◎プレントリスホール・リージェント・オブ・ジャパンは下記の通り社名を変更しました。

新社名：株式会社 プレントリスホール出版

海外零れ話し

阪神大震災、地下鉄サリン事件と暗いニュースの多かった1995年に明るい光を投げかけてくれた野茂フィーバーは、事件が多いと言われる亥年のイメージを変えてくれたのではないだろうか。アメリカでセールス・ミーティングに参加するたびに野球観戦がプログラムされていてその雰囲気に馴染み、楽しんでいるのに、帰国すると全く大リーグの衛星放送を見向きもしなかった筆者も、最近はずっかり野茂ファンに変身してしまった。

アメリカで楽しんだ何回かの野球観戦の印象は、カジノが特殊な雰囲気を感じさせない自然な遊戯場である様に、何処でも、自然に楽しめる人達が集まっていると言うことである。プーイングやウェービング一つをとって見ても本当に楽しんでいるなあ、と何時も思う。或るスタジアムに招待された日、ゲートを通り、長いスロープを登り席へ向かう途中で、ビール、ホットドッグ、ポップコーン、等々買い求めて席に着く。ゲーム中に立たなくて良いようにトイレに入ると長い列が待っている。皆同じ準備をしていると思う……やはりあまり芳香とは言えないが　こうして余暇や趣味を100パーセント楽しむ生活様式は、今やアメリカの人達独特のものではない昨今である。それは、野茂がドジャース入りが決まった時の話として伝えられた「野球を楽しみたい」と言っていた言葉に合い通ずるものがあると思った。去る9月5日に2130試合連続出場を果たし、「アイアン・ホース」と言われたと言うルー・ゲーリックと並んだ新鉄人オリオールズの遊撃手カル・リプケンも野球を楽しんできたからこの快挙をなし遂げられたのだと思う。彼は、「毎回試合出場がファンへの返礼だと思うが、故障や不振の時は苦しい」、と言ったそうだ。アメリカ人の人生に対するフィロソフィーの根底にあるものが、試合後にオリ

オールパークを埋め尽くした観客に「今日はさすがに疲れました。2、3週間まとめて休みを取りたいくらい。でもみなさんご存じのように、わたしは明日もここにいるはずです。」と言ったカル・リプケンのこの言葉に集約されているように思われた。

今や、“サンシン”「三振」がキャスターのボキャブラリーにくわえられているのも面白い。ベースボールは日本でも国技の一つである、と言っても外人なら信ずるのではないかと思う程ポピュラーであるのは紛れもない事実である。しかし、大本のアメリカでは“スリーツ”(three balls and two strikes)であり、“ツースリー”は日本である。四球は“フォアボール”でなくて“walk”と言うので敬遠して歩かせるのと同じ気がする。“Three Strikes Law”と言う法律が昨年施行されたと暫く前の新聞に出ていた。“Three stikes and you're out” law「三振即アウト法」と言うのだそうで、重罪で3回有罪の判決を受けた者は自動的に終身刑になると言う法律を、犯罪多発の州が施行したと言うのだが、野球を国技に持つアメリカらしい、親しみ易いネーミングで、この辺にもユーモアを愛し、楽しむことを忘れない国民性が窺い知れ、好ましい。

日本の国技である相撲に横綱「曙」や大関「武蔵丸」が活躍しており、アメリカ出身者が君臨(?)しているのと同様に、アメリカの野球界へも日本出身者がこれからもっと、もっと進出して活躍して欲しいものだ。首相以上に外交上で“winning home run”を打ってもらいたい。そして小生が訪米し、野球観戦の出来る時には日本の投手が“サンシン”をとってくれたらどんなに誇らしい気がするだろう。(R. A. 記)

「東京の坂と橋と文明開化」を終えて

丸善・本の図書館 鈴木陽二

60回、約5年にわたった「東京の坂と橋と文明開化」を8月号をもって終了することにしました。スタートしたときには、正直のところこれほど長い連載ができるとは思いもよりませんでした。ひとえにご愛読くださった皆様に励まされての継続でした。

私がこのシリーズで意図したことは、日本近代化の過程における欧米学術文化摂取の諸相を探ることでしたが、本誌の性格上できるだけ出版文化に関連する話題を取り上げるよう心がけました。そういうことで、シリーズ名の「東京の坂と橋」はいわば舞台装置のようなもので、

それ自体がドラマの筋ではありませんでした。東京の坂にも橋にもあまり触れていなかったと感じた方もおられたと思いますが、上述した理由によるものであったことをご理解ください。ともあれこのつたない連載が、出版物の輸入によって日本の学術文化発展の一端を支え続けている洋書の業務活動に、多少でも参考になったのであればこれに過ぎる喜びはありません。

この連載を終えるにあたって、長い間ご愛読いただいた会員の皆様を始め、また洋書輸入協会「会報委員会」、ならびに事務局に心からお礼を申し上げます。

うちの会社

(株) 考古堂書店

当社の会社名を初めて見ると「古」という字が入っているため古本を扱っているのかと思われることがよくあります。この社名の由来は別として和書洋書の新刊書店です。所在地は東京駅から上越新幹線で2時間足らずの日本海側新潟市にあり、主要取扱書籍は医学歯学およびその関連分野となっており、販売エリアは外商を中心に新潟県内及びその近県で大学図書館から研究医勤務医学生、開業医まで得意先として展開しております。その得意先に迅速な情報を提供できるように洋書取扱いはまだまだ未熟ですが努力を続けております。

ここ数年の紙のメディアに加え電子メディアでの情報伝達には目をみはるものがあります。その電子メディアを書店としてどうとらえて行くか具体的に販売まで行って模索中ですが電子メディアはセールスからアフターケアまでサポートが大きな取扱要素であり本

にはない面が多く見受けられますが是非、主要な取扱商品になるように取り込んで行きたいと考えております。

洋書販売は大学を中心としたマーケットですが医学系洋書は個人でお買い上げ頂ける事が多く公費注文減少の方向を少しでもカバー出来るようにしたいのですが円高で一昔前の洋書は高いというイメージから和書より手軽になっていることはお客様も感じていると思います。

それと洋書はスタンダードテキストで名著といわれる事が多く改訂するとCD-ROM版も発売され、読書という型と共に検索を中心とした利用方法で進化しております。

当社の今後の主要扱い商品は洋書と和書を中心に電子メディアを加えさらなる発展を考えております。

(風間 保)

インターネットの正体

紀伊國屋書店 会 津 淳

今月から数ヶ月にわたって、インターネットのお話をさせて頂くことになった。最初は、インターネットとはなんであるかから始めたい。

新聞や雑誌の記事がインターネットを説明するときにいくつかの言い方がされるが、そのひとつに「世界規模のパソコン通信」というのがある。しかしこれは間違っている。「世界規模のコンピュータネットワーク」。これは正しい。ではこのふたつのどこがちがうのか。この違いを理解することが、インターネットの正体を知ることにつながる。パソコン通信では、ホストコンピュータと呼ばれるセンター機能を持ったコンピュータが存在する。すべての情報はこのホストに集約され、電子メールも電子会議もショッピングも、すべてこのホスト上で実現されている。NIFTY-ServeやPC-VANなどのパソコン通信はいずれも独自のホストを持っており、ホストコンピュータを持って運営することがパソコン通信のサービスを提供することである。個人でもホストコンピュータを持てばパソコン通信を運営することが可能になり、このような個人規模の小さなパソコン通信はBBS(Bulletin Board System: 電子掲示板)と呼ばれている。パソコン通信にアクセスするときにはパソコンが使われることが多いが、通信機能を持ったワープロやあるいは通信専用の端末機など、コンピュータ以外の機器からもアクセスすることが可能である。パソコン通信と似たものに、JOISやDIALOGなどのデータベースサービスがある。パソコン通信と同様にデータベースサービス提供元もホストコンピュータを持っており、このホスト上にデータベースは構築されている。

それではインターネットはどうなっているのだろうか。インターネットとは、世界中の大学や企業などのLAN(Local Area Network)が相互に接続(Inter-Net-

work)されたもので、センターに位置するホストコンピュータは存在しない。それぞれの組織のLANには複数のコンピュータが接続されているが、LANとLANとを相互に接続することによって、他の組織のコンピュータと接続することが可能になる。世界中のコンピュータが相互に接続されることによって、自分の机の上にあるコンピュータと、インターネットに接続されている世界中のコンピュータのすべてとの間で情報の交換ができるようになる。

交換される情報の筆頭にあげられるのは、メモや文書などのメールであろう。手元のコンピュータでメールを作成(作文)し、これをインターネットに接続されている相手のコンピュータへ電子メールの機能を使って送る。メールを受け取った人は、自分のコンピュータに届いたメールを画面に表示して読んだり、修正を加えてから別の相手へ送ることができる。また相手のコンピュータへログインすることによって、相手のコンピュータ上でデータベースの検索などをしたり、情報を取ってくることができる。ログインする先は一ヶ所に限らず、世界中のどのコンピュータへもログインすることが可能である。もっとも誰もがログインできるように設定されているコンピュータは一部だけであるが……。

世界中のコンピュータとつながることによってさまざまなことができるようになるが、具体的な内容については来月からお話することにして、パソコン通信とインターネットの違いを表にまとめて今回は終わりとしたい。

	ホスト コンピュータ	情報の流れ
パソコン通信	存在する	双方向の情報交換
データベースサービス	存在する	片方向の情報提供
インターネット	存在しない	双方向の情報交換

洋書輸入協会史 (99)

洋書輸入協会顧問 相 良 廣 明

113 如文出版の閉鎖と除名（前回よりの続き）

113.8 如文出版へ除名の通知

昭和40（1965）年10月25日の洋書輸入協会臨時総会の席上で、如文出版の除名が決議されると、事務局は早速10月26日付で、次のような通知文を送った。

記

如文出版株式会社 加藤良三殿

貴社は、去る9月15日銀行よりの取引停止を受け、続いて営業所を閉鎖される事実に基き、当会は調査を致したところ、本会々員に対し多数不渡手形を発行し、且つ海外取引先の負債に対しても支払不能の状態にあることが、在日出版社代表者よりの申し入れにて判明致しました。斯かる（かかる）事態を生ぜしめたことは、本会並びに会員の名誉と信用を著しく失墜せしめる結果となり、そのことは、添附海外代表者の申し入れ書によっても明らかで、誠に迷惑至極であります。

依って、本会は規約第21条及び第22条による10月25日の臨時総会の決議により、貴社を除名することに決定致しましたので、この旨通知致します。尚、本会々員並びに海外負債に対しては、優先的に返済の方途を講ぜられる様要請致します。（以上）

113.9 如文出版社の倒産について

洋書の業界での倒産は少ない。その中でも、洋書輸入協会々員の倒産は、驚く程少ない。それは業界自体の規模が小さいこと、同業者の数が少ないこと、洋書輸入協会の会員のほとんど大部分が30人以下の企業によって構成されていること、そしてそれ故に、多方面の洋書分野のそれぞれに専門を持ち、棲み分けているため、他社と競合する分野では激烈な競争がありながらも、自分の専門分野で培った専門知識を活かし、どうやら経営を維持出来ているためであろう。

ここで強調しておきたいのは、業界全体の気風が非常に質素だということである。同業会の理事会はコーヒーで開催されるし、同業会の懇親旅行も非常に質素である。同業とのつき合いも数少ない接待も赤提灯で済ませている。この質素さは、同業で最も古くかつ大手の丸善の社風でもあるし、長老であった故福本初太郎氏や、今や業界最高令の服部正喬氏らによって築かれた業界の気風で

もある。利益が少なくとも、好きな本のために我慢するという今時あまり通用しないかも知れない気質（かたぎ）を持っている人も多く残っている。

この質素の気風は、何かの機会に他の業界の人達とつき合ってみると良く分かることである。

以上のようなことのために、洋書輸入協会の会員における倒産は、額に汗して働いている限りはあり得ず、たまに起こるそれは、放漫経営の結果以外の何ものでもない。如文出版の倒産が、日本の業界だけでなく、世界の業界を騒がせた所以（ゆえん）でもある。

114 OCS、洋書輸入業界に参入

OCS（Overseas Courier Service Co., Ltd. 海外新聞普及株式会社）との接触が、昭和40（1965）年4月に入ってから始まり、翌昭和41（1966）年2月に終熄した。この間の経緯を簡単に記しておきたい。

昭和40（1965）年4月25日の理事会で、洋販より、同社のSole Agentである英国の新聞Statesが、AgentをOCSに移した旨の報告があった。洋販によれば、OCSのAir Cargoは、洋販のAir MailやAir Cargoよりも早く、独特のシステムを採用している様子とのこと。これが、JBIAとOCSが接触を持った初めてのケースである。

OCSは、昭和32（1957）年に、主要新聞社及び外務省、大蔵省等の後援のもとに、「新聞等を迅速、低廉、確実な方法で輸送し、これを普及することを目的として」設立されたもの。当初同社は、世界各地に取次代理店（昭和40年現在18か所）を設けて、その地域宛の新聞を一括直送し、代理店の手を経て読者に配布する手法を取り、郵便局を経由しないで各地へ航空貨物便で輸送するため、割安な価格が設定出来、その日の新聞が印刷されてから数時間後には羽田から送り出しているとのこと。

このOCSが、日本の海外発展と共に次第に大きくなり、戻り便の活用ということもあって海外のニュース性のある新聞・雑誌のAir Cargoによる輸入と配達を行うようになったため、洋書輸入協会々員の扱う業務と競合するようになった。

昭和40（1965）年6月には、Economist 500部をAir

Cargo で輸入し、予約金を取って配達し、McGraw の Business Week の Air Cargo 輸送を引き受けるなど、次第に JBIA 会員の業務に接近してきたために、7月6日に協会理事会に OCS の人に来て貰って懇談をした。この席上では双方の業態やポリシーなどの説明を行い、それぞれ要望を述べて理解を深め合ったが、どちらかと言えば議論は平行線を辿り、物別れに終わった感が強い。

その後も OCS 側の積極的な姿勢が伝えられるため、同年12月23日に再び懇談の機会を持つこととなり、今後は協会理事会側からは、新聞・雑誌に関係のある5社が出席、OCS からは6人が出席、OCS の新築ビルの応接間で会談した。今回も双方より要望を出し合い、協力出来る所から協力していこう、来年早々に双方から委員を出して小委員会を作り問題点を詰めていこうということとなって友好裡に別れている。

ところが、翌昭和41(1966)年1月25日の理事会で OCS から丸善へ連絡があったことが報告されたが、それによると、どうも先回に懇談した問題点の大部分が御破算と同じこととなっており、寧ろ対決姿勢が表面に出て来ているようであった。

2月25日の理事会では、USACO の山川氏と三洋の鈴木氏が、再度 OCS を訪問、懇談した結果が報告されたが、それによっても、OCS 側との歩み寄りは前途程遠いと思われた。

以来今日まで30年、一触即発を思わせた JBIA と OCS とは、当時の双方の展望がいずれも外れたためか、正面切った対決の機会はなく、不即不離の関係のまま推移している。そしていつの間にか JBIA 側の洋書店の店頭には、OCS の提供する Economist などのニュース性のある新聞・雑誌が並び、協力関係も築かれてきている。これも、双方共に出来ることと出来ないことがあり、自然に生じた境界線が無理なく維持されてきているためであろう。

115 McGraw-Hill Book の日本代表、稲垣氏交代
昭和40(1965)9年11月17日の理事会に、McGraw-Hill Book の Lambert 氏、内田氏(元内田大学堂)、それと稲垣氏が出席、組織変更と引継ぎの挨拶があった。それによると、今までの日本代表の稲垣氏は、Reprint 版の専任(Director)となって、Book の販売面から手を引き、元 Holt 社の Representative であった Lambert 氏が日本及び東南アジアの販売の支配人となった。

次に Lambert 氏よりおよそ次のような説明があった。

(1) 自分は、10月18日から仕事を始めている。

(2) McGraw-Hill Book は、全社的な規模で組織を改善しつつある。社長以下の主要メンバーも次のように変った。社長 Booher 氏、上級副社長兼国際部長 Sweeny 氏。日本は Sweeny 氏の部下の stone 氏に属しているが、実際には Stone 氏のスタッフの Director of Market の Wulf 氏が日本の Book 販売を受持ち、もう一人のスタッフの Baensch 氏がリプリント版と翻訳権の担当となり、稲垣氏は同氏に属することとなる。

また今までは、世界各地の問題をすべてニューヨーク本社で決裁していたが、今後は地域・地域に大幅に権限移譲をすることになった。

(3) リプリント版の方は、既に300点を数え、アジア版ではなく今後は International Student Edition と名前を変更し、これから先数か月のうちに40数点の出版計画があるので、非常に忙しくなっている。

(4) 内田氏は大学・会社を廻り販売促進活動をする。

(5) Lambert 氏は、東南アジアを頻繁に廻ることとなる。

以上の Lambert 氏の説明に対し、理事会側は丸善の桜井氏より、稲垣氏のこれまでの御苦勞に対し感謝の意の表明があった。殊に日本の Book Market には特異な点があり、稲垣氏がこれを充分理解して活動されたので、貴社の売上をあげることに大きな力があつたと賞讃している。

しかしながら理事会メンバーは、ひそかに稲垣氏と Lambert 氏の交代に疑念を持ち、この人事を危ぶんでいた。というのは、稲垣氏はニューギニアの生き残りであり、温厚な紳士で高い知性を持っている反面、正論を堂々と McGraw Book の本社にぶっつけ、日本のマーケットを理解させるために骨身を惜しまなかったのも、或いは米本社に煙たがられたのではないかと思われていたからである。10月25日付の如文出版倒産に際しての米英出版の代表からのクレームにも、McGraw Book は加わっていて Lambert 氏が署名していたが、10月18日から同氏が実務を担当していると聞き、稲垣氏だったらこんなことはしないのにとの感を深くした。

果して Lambert 氏は、以後いくばくもなく暴走して米本社に呆れられ、日本代表には稲垣氏が復帰して一同胸をなでおろすという一幕がついている。(続く)

COMCの補遺版
1995年9月、一括刊行！



Comprehensive Organometallic Chemistry II

有機金属化学全書（全14巻）

Editors-in Chief: E.W. Abel, F.G.A. Stone and G. Wilkinson

9000 pages approx(14 vols.) ISBN 0-08-040608-4

Imprint: Pergamon

出版前特価(1995年8月31日まで): £ 2050.00 出版後価格: £ 2795.00

1982年にCOMC が刊行されて以来、待望の補遺がいよいよ刊行されます。このII は改訂版ではなくCOMC（1981年以前をカバー）以降の1981年から1993年までの文献を紹介し、COMC刊行以降の有機金属化学の研究動向を把握できる資料を提供します。有機金属化学の全容を知るために、この機会にCOMC・COMC IIを共に揃えることをおすすめします。

- Volume 1: *Lithium, Beryllium and Boron Groups*
- Volume 2: *Silicon Group, Arsenic, Antimony and Bismuth*
- Volume 3: *Copper and Zinc Groups*
- Volume 4: *Scandium, Yttrium, Lanthanides and Actinides and Titanium, Zirconium and Hafnium*
- Volume 5: *Vanadium and Chromium*
- Volume 6: *Manganese Group*
- Volume 7: *Iron, Ruthenium and Osmium*
- Volume 8: *Cobalt, Rhodium and Iridium*
- Volume 9: *Nickel, Palladium and Platinum*
- Volume 10: *Heteronuclear Metal-Metal Bonds*
- Volume 11: *Main-group Metal Organometallics in Organic Synthesis*
- Volume 12: *Transition Metal Organometallics in Organic Synthesis*
- Volume 13: *Structure Index*
- Volume 14: *Index Volume (Formula Index/Subject Index)*



ELSEVIER
SCIENCE

エルゼビア サイエンス ジャパン

〒113 東京都文京区湯島3-20-12 ツナシマビル・アネックス TEL.: 03-3836-0810 FAX: 03-3839-4344

1995年9月 通巻第340号 洋書輸入協会

編集者 神田 俊二

〒103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

☎(03) 3271-6901 FAX: (03) 3271-6920

印刷所＝藤本綜合印刷株式会社